

戦争災害研究室だより

第 14 号 2008 年 6 月 30 日

東京大空襲・戦災資料センター

136-0073 江東区北砂 1-5-4 財団法人政治経済研究所内 tel03-5857-5631 fax03-5683-3326

HP <http://www.tokyo-sensai.net/>

第 14 回研究会報告

日時 2008 年 2 月 23 日 (土) 14:00 - 16:00

場所 財団法人政治経済研究所 共同研究室

報告題 『戦災復興の日英比較』(松村高夫氏ら編、2006 年 11 月、知泉書館刊)の書評

報告者 大岡聡

出席者 青木哲夫 荒井信一 一瀬敬一郎 大岡聡 大竹正春 黒田康弘 高橋未沙 土岐島雄
二瓶治代 山辺昌彦 山本唯人 吉田裕

報告要旨

1970 年代に高まりを見せた空襲・戦災記録運動と、それに触発され進展した空襲戦災史研究は、被災者の目線から被害の実相と空襲の全体像を解明しようとするものであった。それは、自治体・復興当局者の目線でまとめられてきた「戦災復興誌」には飽き足らない、被災者市民の思いを原動力としていた。70 年代後半以降、浩瀚な空襲戦災史が各都市でまとめられてきたが、充実した空襲・戦災に関する叙述に比べるならば、戦災都市復興や被災者の戦後に関する叙述は(例外はあるにしても)やや薄いとの印象を持つ。都市空襲の歴史的意味の解明については、「戦災復興」や「終わらない戦後」の問題をも含み込みながら進められていく必要があるし、またその「特殊と普遍」を明らかにするためには、国際比較の視点は重要であろう。

その意味で、ここで取り上げる松村高夫・N・ティラッソー・長谷川淳一・T・メイソン著『戦災復興の日英比較』(知泉書館、2006 年)は興味深い書物である。本書は 1990 年～1993 年にかけて行われた、慶應義塾大学経済学部と英国ウォーリック大学社会史研究所による共同研究の成果である。執筆した 4 人はいずれもイギリス近現代史研究者で、特に社会経済史、労働史、社会史の専門家であるが、イギリスをはじめとするヨーロッパで戦災都市復興に関する研究が進展しつつあるのを承けて、日本の戦災復興の特質の解明をも手がけ、その日英比較を通じて、日英における「戦後再建」の歴史像を再検討しようという、意欲的なテーマを掲げて本書をまとめあげた。

空襲戦災の全体像とその歴史的意味の解明という空襲戦災史研究の問題意識と、本書のそれとのズレは明らかであるが、しかしながら本書が空襲戦災史研究にとってどのような示唆をあたえるのか、空襲戦災史研究と戦災復興史研究との架橋がいかにしてなされるべきか、このような問いを念頭に置きつつ、本書を読んでみた。

これまで都市計画史研究の分野で戦災復興の研究はあるものの、各都市の事例研究が乏しく、計画作成から実施過程までをより広い政治的・経済的・社会的コンテキストに位置づけた歴史学的な研究があまりなかった。本書は、(1)日英両国は、いかなるヴィジョンのもとに戦災復興を計画したのか、(2)計画実施過程においていかなる困難に直面し、どのような対応を余儀なくされたのか、(3)いかなる計画案を実現し、あるいは実現できなかったのかの実証的検討をふまえ、通じて日英の「戦後再建」の歴史的意義を再検討することを課題としている。その際重視されるのは、中央・地方関係、およびそれぞれのレベルでの政治家、官僚、専門家、経済人、市民などをアクターとする政策決定過程とその問題点を検討することであり、また、こうした過程を経て実施された戦災復興過程そのものが社会にどのようなインパクトを与えたのか、市民とどのようなかかわりを持ったのかが検討された。

内容紹介の詳細は省き、本書の結論を紹介しておこう。終章では日英比較のうに「戦災復興の歴史的意義」が総括されている。そこでは第一に、日英両国において戦災復興計画は、政府によって当初それなりに熱意を持って取り組まれた政策であったにもかかわらず、その後の経済危機の前に経済政策が最優先され、政府の変節＝戦災復興の下方修正が行なわれたことが共通の特質であった。第二に、戦災復興の過程における政府と地方当局との関係については、日英に違いがある。イギリスでは地方当局は政府の圧力によって多くの妥協を強いられたとしても、圧力に完全に屈したわけではなかった。政府と地方当局の間には対立の過程があったし、政府の意に反することを地方当局が選択することもあった。一方、日本では政策や復興計画の策定が常に政府の官僚層の意向にもとづいて行なわれ、地方当局はそれに従うという上意下達式であった。第三に、戦災復興と市民の関係では日英に共通する特質、すなわち政策・計画の策定過程に市民が直接関与する余地がなく、市民の側に長期的な都市計画への理解や関心が生まれることがまれであったことが指摘される。

最後に本書では、戦災復興の検討が戦後再建に関する従来の歴史像の再検討を促す、ということが主張される。イギリスでは、介入主義的スタンスにたち、近代的で平等な福祉国家の創出をめざす「コンセンサス」が戦後再建のあり方に関して形成された、と論じられてきた。しかし戦災復興の過程では、財政上の懸念がブレーキとなったし、そもそも戦災復興の理想に対する保守的な抵抗が存在したのであり、戦災復興に関するコンセンサスの形成は否定せざるを得ない。すなわち、戦後再建の「コンセンサス」を基盤とした戦後イギリス史像は、見直す必要がある。一方、日本の戦後再建は、経済改革、労働改革、農地改革の点では戦前のシステムからの一大改革が行われたが、上意下達式の都市計画のシステムに関してはまったく改革が行なわれなかった。したがって、改革がなされたシステムとなされなかったシステムが併存したことの帰結としての戦後が問われなくてはならない、というのが日本の戦後史への含意である。

報告では以下の5点についてコメントを行った。第一に「戦災復興の日英比較」というテーマを持った本書は、未開拓の分野を切り開いた研究と評価できる。都市計画史の蓄積はあるものの、「戦災復興」が戦後日本社会にいかなるインパクトを与えたかという点については、まだまだ研究が少ない。諸外国との比較によって日本の空襲や「戦災復興」の歴史的意義と特質を解明していくことも必要であろう。ただ日英では空襲の時期や規模が大きく異なるし、また労働党政権のできたイギリスの戦後再建と、アメリカによる日本の占領改革では政治的枠組が大きく異なるのであり、これをどう処理するか。「戦災復興」の比較史の方法がより吟味される必要があろう。

第二に、本書は歴史学的手法による実証的な成果であると同時に、「戦後再建」という歴史的文脈

のなかに戦災復興を位置づけようとしていること、政治史や社会経済史との接合を意識し、従来の歴史像を再検討しようとしている点は新鮮である。

第三に本書を読む限り、都市計画理念における社会構想という点では日英の違いは大きいと思われる。本書の紹介によれば、イギリスの戦災復興理念では、包括的な都市計画による生活様式の階級間格差の是正＝都市社会の平等化・民主化が目指されていたとされる。日本の都市計画も、都市問題の解決が課題とされていたのは当然であるが、都市計画を通じての階級間格差是正＝都市生活の平等化・民主化という点では、特筆すべき理念を持たなかったのではなかろうか。またイギリスの計画のなかには、近隣住区計画によってコミュニティの活性化による社会統合が意識されていたが、日本の都市計画のなかには、地域社会計画＝社会統合政策が含まれていたであろう。

第四に、空襲の経験・記憶と戦後の関係である。震災や空襲といった大規模な都市の惨害は、平素みえなかった社会矛盾を露呈させる。イギリスでは空襲経験が社会矛盾の克服策としての「戦後再建」理念を生み出し、人びとの空襲の記憶がそうした「戦後再建」への支持を生み出したとするならば、日本ではどうだったのか。また空襲の記憶のされ方が、戦後都市社会形成にどのような刻印を与えたのか、いわば記憶の社会的機能といった観点から考察することで、空襲戦災史研究の枠を拡げることのできるのではなかろうか。逆に戦災復興や戦後再建のあり方は、空襲の記憶の編成のされ方にどのような影響を与えたのか。その考察の延長に、空襲記録運動の歴史的意義もあらためて展望されるのではないと思われる。

第五に、本書をふまえると「戦災復興」の政治社会史、あるいは地域史研究としての戦災復興史へという課題が浮かび上がる。本書は戦災復興計画に対する市民のかかわり、反対運動を検出した。しかし本書は日本の都市計画システムの「上意下達式」を強調することをもって「戦後再建」の質を問おうするあまり、これらの市民の運動は、都市計画システムを前提にした私的利害・既得権の主張であり、政府や市当局に対する不信の表れと評価されている。しかしこれら市民の動きを、占領期における地域政治社会構造の民主化にとっての意義という観点から考えた場合、また別の様相・意義づけが浮かび上がるのではなかろうか。評者の関心はそうした点にあり、今後考えたいテーマである。

討論概要

（質問）敗戦直後の経済安定本部が調べた、日本の国富被害統計で、「直接の空襲被害」でない、建物疎開で打ち壊した財産という「間接被害」の巨大さが印象的だった。建物疎開は、実施面で、私有財産を広範囲に接収・破壊しており、実態面・実施面を考えると別の評価になるのではないか。

戦中の防空都市計画は、建物疎開などで実際に壊したことも含めて、評価の対象になっているのか。

（報告者）理念のレベルの評価はあるが、防空都市計画が実施されても、大して成果が上がっていないという評価である。例えば、建物疎開の跡地を利用して、広島の大通りや名古屋の100メートル道路は作られたが、都市改造に成功したかということ、はなはだ疑問である。

理念の面では、フラミングの壮大さが評価の対象になっている。ただ、結果として空襲で甚大な被害を出しており、全く防空の役に立たない計画だった。

（質問）理念と関連するかもしれないが、関東大震災の時はアメリカから、アメリカ史で実証史学を確立したイヤードが来ている。

官僚の比較という面で、いろんな所で影響しているような気がする。だから、東京都の官僚の場

合も、中央政府の官僚と別に考えた方がいいのではないか。

（報告者）イヤードは後藤新平の招きで来日している。後藤とつながりがある。都市計画官僚には後藤の影響も、人脈的にはある。だから、アメリカの革新的な思想が、都市計画官僚になかったとは思わない。ただ、技術官僚の発想と、後藤が持っていた社会統合や社会政策という発想は、分岐するところがあるのではないか。

（質問）『山の民』で有名な、江馬修の父親が東京都の水道局に勤めていて、井の頭の水源地を公園化している。やはり、大正期や昭和前期の東京都の官僚は、一味違う印象がある。それは戦後受け継がれているのか、いないのか。

（報告者）東京の技術官僚でも優秀な者は、内務省から来たり、内務省に行ったりしており、人事交流がある。東京のプランニングをしたのは、石川栄耀である。彼は内務官僚で、都市計画学会の大物でもあった。名古屋へ行き、満州には行き損なって、東京市に来た。その後、東京都の建設官僚、都市計画官僚のトップになり、戦後の戦災復興も彼が主導している。

（意見）日本の震災復興と戦後復興を比較する方が、イギリスと比べるより大事ではないか。

（意見）都市計画官僚は面白い。内務官僚だが、地方についての専門家的な示唆もするので、教本に即したものも作り上げる。ただ、この本も言っているように、最後は上の官庁に従わざるを得ない、そこには逆らえない。

戦時下の都市計画は結局、都市計画ができなくなり、防空計画に乗る形で、都市計画が作られた。いろんなプランをいろんな人がいろんな風に作って、どういう整合性があるのかよく分からない。

「防空のための」は冠文句で、計画の中身はあまり関係がないものも結構ある。これは戦争の最中にできる訳ないだろうというものも含めて、プランを作っている。

この本でも紹介されているが、石川栄耀が戦時中に『皇国都市の建設』という本を出す。最初に少し神がかり的なことが書かれるが、ドイツなどの文章を訳しているもので、内容は、ほとんど技術的なことである。この名前なら、広まるだろうと付けたようだ。したがって、戦後に「皇国」が崩れても、痛くも痒くもない。むしろ、理想的に戦後計画を進め、「白紙のキャンパスに描いたみたいだ」という石田さんの表現はよかったと思う。理念的には全く共通しているので、変わらないことは、いい面と、悪い面との両面がある。これはプランナーだけでなく、建築などもそうである。

防火建築論について、戦後まで含めて見たが、「戦前から防火対策でやっていた」という話でつながっている。そこにいい点と悪い点があると思うが、戦時中の事は踏まえていない。戦争責任まで言う必要はないが、問題があるのではないか。

それと戦時住区のことであるが、これは源川真希さんの『東京市政』という本の中で、浅沼稻次郎が、あれこれやっている話を書いている。ただのお題目と思っていたが、そうではなさそうである。

全体としてみると、人員疎開を含めて疎開政策が始まると、必要がない奴はみんな地方に行けという方向になる。特に大空襲の後になると、無秩序に皆疎開するので、途中から「必要な人員は行くな」ということが出てきて、6月の時点では焼跡に戦時住区という住宅を作って、戻ることを許可している。

引用にも出てくるが、人がみんないなくなったら戦時体制は作れないので、もう一回作り直して、戦争を続けるための施策として出てくる。基本的な性格は多分そうだと思う。それを利用して、実際にいた住民がどうするかということは、あったかも知れない。

基本的な性格がそうなので、引用にある通り、8月15日になったら、もうやめたと言って、戦災

復興にくるっと変わる。というのは、土地計画プランナーにとっては理念に基づいた、住区という構想がなかったからであろう。

いずれにしても、源川さんがやっていることを含めてやる必要があると、本を読んで思った。彼も、東京市の法制研究会、それを一つの層として、市政官僚の革新派というのができるのではないか、それが東都政くらいまで続くと言っている。

(報告者)ここに出てくる、「社会経済的な格差を是正する」という明確な目標を持ったグループが、市政の中に一定程度つくられており、戦前・戦中・戦後と連続しているという議論があるが、その中には、都市計画官僚はいない。やはり都市計画と社会政策は切れていると思う。

(意見)イギリスの方の評価だけれど、一つは経済史の人が多い。だから、「労働と保守のコンセンサス」という言い方は、ものすごく荒っぽい言い方だと思う。

「総力戦がなぜ、福祉国家への移行を促進したのか」ということでは、イギリスの場合は、ノンポリの強力な労働組合と、社会主義的な知識人が一緒に労働党をつくっている。総力戦段階になると、例えば、軍需工場に転換することでも、ノンポリで、下まで掴んでいるので、労働組合の協力ができない。だから、労働組合出身の人を政府の中に入れている。

もう一つ、国民統合のために、「Peoples War」と言う。その面から、軍人の家族が母子家庭になったら、福祉みたいなことをやる必要があって、それを完成させたのが福祉国家である。

つまり、理念が先にあって福祉国家になったわけではなく、なし崩しに、「Peoples War」がやって終わったら、福祉国家になっていたというのが、現実に近い。この本だと、理念が先行で捉えているのは、そこはちょっと違うと思う。歴史の理解の仕方に観念的な部分がある。

(報告者)そこも論点になると思う。つまり、「戦前から改革志向や理念があり、それが実現した側面もあるのではないか」という考えがあるようだ。

(意見)戦争の評価との関係が微妙である。木畑洋一さんたちは、総力戦の中でファシズムと戦うという理念で、民衆運動の戦争協力を取り付けるために、何らかの形で戦後改革の構想を示さざるを得なくなった。太平洋憲章から始って、それらは連合国側の特色であるが、「それに対して日本は」と今まで議論してきた。

しかし、日本側の積極的な戦後構想は、近衛文麿、佐藤尚武、大木田三郎ぐらいで、あまりないように見える。日本と連合国、イギリスは違う面もあるような気がする。戦後再建の構想の比較を、都市計画、戦後復興だけではなくて、追ってみる必要があると思う。

(意見)戦後社会党の構想が、グラスルーツでやっていたものが一方にあって、もう一方からは帆足計とか勝間田清一とか、企画院官僚のものがあつた。企画院官僚ばかりやると、野口さんの言うように、総力戦論に似てくる心配がある。

(報告者)イギリスへの空襲で、民間地域を爆撃したのは初期だけか？

(意見)イギリスへの空襲は初期だけ。本格的なのはロンドンとコベントリーなどいくつかに限られる。あとは、時期はもう少し後になるが、旅行案内所の3つ星の付いている建物を破壊するという爆撃があつた。

それとドイツとソ連は、そんなに無差別爆撃はやっていない。やはり、イギリス・アメリカがもっぱらやっている。

(報告者)ドイツでも、戦災復興などの研究が出てきているのか。

(意見)戦災復興研究はあるようである。

ドイツへの空襲では、ナチス党のガオライダーは、ナチスの中でも頭のおかしい奴で、防空壕を

作らせなかった。そのために、ドレスデンの死者が非常に増えた。アメリカの歴史家はそれを弁解に使って逃げる。近くのチェロニスっていう所には、非常に賢明な指導者がいて、防空壕を掘らせたから、トン数に対して、非常に犠牲が少ない。だからナチスのせいだとしている。そういう風にも読めないことはない。

戦後、ドレスデンは東ドイツになったので、復興はほとんど 90 年代以降である。

ソ連式の復興では、宮殿などは直す。例えば、レニングラードのそばに、プーシキンという夏の別荘地にエカチェリーナ宮殿がある。そこまでドイツ軍が来て、徹底的に壊されたのを、拾い集めて直した。それから、ワルシャワとクラクフがそうである。権威主義的なものの再建をまっさきにやっている。

だから、ここにあるような、民主的な、階級格差を無くすような復興をどこまでやったか分からない。

（報告者）どこかで読んだが、ドイツでは戦災復興の中でも、住宅供給に力を入れており、社会政策的な所を優先したと言われる。それに対して、日本はと言われる。

（意見）それはある。震災の話と同じで、1920 年代にバウハウス運動があった。あの時期に、都市建築でいうと石造建築からコンクリートになっていく。そういう建築のモダニストたちが、一般労働者住宅とかを 1920 年代に一生懸命やった。だから、その伝統があるのではないか。

（報告者）震災復興の時も、日本の都市計画はやはり道路で成形してという話ばかりである。住宅を系統的に作る発想が、少なくとも戦前の場合はない。明治からの「伝統」で、道路ないしは水路ばかりである。

（意見）権威主義で、その DNA が今も続いているのではないか。

（報告者）土木国家日本というのが都市計画には明治時代からある。

（意見）国民性の問題がある。いわゆる第三人という言い方、つまり朝鮮人は戦勝国民だけど、認めたくないという感情が日本人の中にあった。ある時期までは、うっかり手を出すという危ないという中で、朝鮮人がドブロクをつくって闇市で売っていた。そこに日本のやくざが寄生して、新宿などの街ができていった。

ドイツの場合はこれに該当するのがユダヤ人になるが、それは殺しちゃったから、日本みたいな問題は起きない。そこは非常に大きい違いだと思う。

（意見）ダワーの見方だと、民衆のたくましさとか、そういう文脈の話になる。全然違う話に位置付けられている。

（報告者）やはり、都市計画の発想からすると、日本人は公共性がないという話になるだろう。

（質問）比較ということで 3 点を聞きたい。1 つは、日本の戦災復興が縮小された時に、安井知事が断固たる削減方針で臨んだことが挙げられていたが、安井都政の位置をどのように考えればいいのか。復興を都市計画の観点で捉えると、計画は縮小されるので、否定的な評価になるが、都政は食糧対策、住宅対策、戦災孤児対策などを含めた全体構造の中で動いているので、その中で都市計画をどう位置づけるのかという観点から捉える必要があると思う。

2 点目はイギリスとの大きな違いは、日本が占領下であったことである。だから、GHQ の東京再建に関する方針があったはずで、それをどう枠組みに取り入れていくのかということがあるのではないか。

3 点目は、空間の枠組みの問題で、イギリスとの比較だったが、東アジアの中で比較するという論点もあるのではないか。GHQ の立場から、例えばソウルとか、台湾の復興という課題との関連

で見たときに、東京の再建をどのように考えていたのか。その中で、戦災者の処遇をどうしたのかという問題も、比較していけたらいいと思う。

そういうGHQの問題と、東アジアという空間の中で見ていくと、もう少し実態的な比較の意味が、出てくるという気がする。その3点である。

(報告者)お答えできる準備はないが、安井ということで思い浮かべたのが、先ほどの闇市との関連で、安井のもとで露店整理事業がおこなわれて、GHQの命で、東京から路上の露店を一掃する政策をやっている。それが安井都政下で、1949年から51年にかけて行われる。その時に、その露店業者たちをどう更生させるかまでケアする。転業資金の貸出や、露店を整理してそこに建物を建てて露店営業者を入居させて営業させるなどの政策を行う。

すると、戦災の被害者としての露店営業者たちに対する、一種の社会政策という位置付けも可能である。しかし、露店の営業者たちを収容する施設を作る政策を、さっきの石川栄耀が取り組む。なんとか局長の時に、その露店整理政策の責任者であった。彼の貢献は露店営業者整理令のその後をケアしたことにあるが、『露店』という記念誌も出ている。石川は都市計画官僚のトップだが、そういう発想もあった。

物理的な都市再建と社会の再建という問題を考えていくと、いろんな絡み合いが出てくるかも知れない。その二つを切るべきでない、というのは当たっていると思う。

2点目のGHQの東京再建構想は、あまり聞いた事がない。もちろん、都市の復興は考えていたとは思いますが、史料がほとんどない。有名な話は「都市政策なんて贅沢だ」という、贅沢品の50メートルの幅の道路はいらないという話がある。社会再建も含めたトータルな都市再建構想を、GHQがどの程度持っていたかは、分からない。

それから、比較史ということで東アジアを入れてやる必要がある。その前には、戦勝国、敗戦国ということだけではなく、脱植民地という課題がある。そうすると、比較が可能な枠組みをどう作っていくのかが、日英と同じように難しい課題になってくる。しかし、大事な課題であるとは思っている。

(質問) 東アジアで戦災を受けた地域として、どこか指定する場所があるのか。

(報告者) 台北とか、高雄とか、台湾にある。ソウルはそんなに空襲されていない。

(意見) 平壤はひどい。ビルディング3つしか残らなかったと言われるほどである。

(意見) 戦災復興史を視野に入れることは重要であると思う。死者の追悼から始まって、どういう戦争の記憶、どういうアイデンティティが形成されていったかということをやったのは無いのかどうか。例えば、復興記念館があるのは、浜松くらいなのか。

(意見) 仙台にある。

(意見) 浜松は昔、見に行った。艦砲射撃と空襲との両方があった。

福井のように壊滅した街は、市史や県史の中で戦後史研究がありそうな気もする。洗い出してみ必要がある。

(報告者) 福井は戦災だけでなく、水害や地震もあった。そこから復興したのが市民の誇りであり、アイデンティティとなっている。不死鳥、フェニックス福井といっている、フェニックス大通りというもある。その開発主義的な市政の帰結が、原発誘致に繋がっている。

戦災復興の時の市長が熊谷太三郎で、後に国会議員、参議院議員になる。大臣になって、福井に原発を誘致している。開発主義的な市政を敷いた市長である。モダニストだと思うけれども、彼は強圧的な復興事業で、反対運動を押しつぶした。それが感謝されてしまっている。

福井の戦災記録運動は、まだ実証的に見ていないが、1960年代に県庁の移転問題、つまり、お城の跡に県庁作るかどうかが市民の間に論争があった。その街づくりの運動の中でアクティブだった人の流れも、戦災を記録する運動に合流しているのではないかと。街づくりと空襲記録をどうするかの問題は、非常に開発主義的なことをしたために1960年代70年代に顕在化するのではないかと思う。福井はかなり早いペースで成功した例であり、全国的に模範的な復興をやった。ただ、全体からすると極端な例かも知れない。

ゆきのした文化協会が戦災の資料館をつくっているが、ゆきのした文化協会の中にも街づくり運動やっていた人がいる。

(意見)最近、中央レベルで、敗戦の記憶、トラウマの克服をあつかった本がずっと出ている。福岡良明さんも、戦後の復興と平和主義とナショナリズムとの擦り合わせ、折り合いをどう付けていくかという話を出している。それを具体的に、地域レベルで見えていくと、もう少し別の論点が出てくると思う。

(報告者)今、ナショナルアイデンティティの問題とか、平和主義の問題との関わりでの記憶論の問題が出て来ている。靖国も大事だが、社会・地域社会の形成に空襲が刻印を与えているのかどうかという所まで出来ないだろうか。やはり、吉田さんが言われるように、特定都市で、政治行為を含めて見ていくことができないだろうか。

(質問)1952年の5月2日に、全国戦没者追悼式をやって、その後、1963年までずっとしていない。それが、県レベルではどうなっているのか。やっている所もあるし、断絶している所もあるし、よく分からない。

(報告者)復興祭とか、空襲1周年とかはある。追悼式を、占領中はGHQが禁止している。

(意見)公の葬儀、公葬は、禁止はしていないのではないかと。

(報告者)福井市が、空襲1周年はしているが、何回か続いて、少し途切れて、講和後に、復活している。

(意見)宇吹さんの研究で、広島市の平和祈念式典の歴史をずっと追ったものがある。あのよう地域レベルで追いかけてみる必要があると思う。

(報告者)福井は7月19日であるが、空襲記念日に合わせて、何周年という福井祭をしている。もとは追悼的な意味合いの式典から始まっている。

(意見)長岡も8月2日にしている。

(質問)慰霊堂での東京都の式典はいつからはじまっているのか。講和発効後からなのか。切れ目はないのか。

(意見)1951年の9月に、第1回が慰霊堂でおこなわれている。切れ目はないと思う。9月1日と3月10日の年2回やっている。

(意見)平和の日を作ったのはずっとあとで。90年代入ってからである。

(質問)都知事は毎回来ているのか。

(意見)本人が来る場合と、代読させる場合とあるが、一応来ている。

(意見)広島では首相が来るか来ないかは大きな問題である。日本政府としては微妙な問題となっている。ようやく首相が来るのは、佐藤内閣の末に60年代の末だと思う。

長崎は、三木首相が最初ですごく遅れる。それは、日米同盟の核戦略との関係があるが、いろんな要素が絡み合っていて、記念式典が執りおこなわれるようである。地域レベルでずっと追いかけて、1つ空襲関係でやってみたら面白いと思う。

(質問) 東京の式典は政府関係者が出るのか。

(意見) 政府関係者は来ていない。ただ、皇族がたまに来る。

(質問) 誰なのか、三笠宮か。

(意見) 慰霊祭はずっと高松宮が来ていた。その後は、三笠宮で、秋篠宮妃紀子も来ている。

(意見) 高松宮は同胞援護会の会長であるから、その関係があるのかも知れない。

(報告者) 占領下ではできなかったのか。

(意見) 公の管理がかかるものは、基本的には禁止されているようである。

(意見) 都の場合は、慰霊で復興祭のようなものではない。

(意見) 東京都仏教会がかかわっている。

(質問) お坊さんが出てきて、神主は出てこないのか。

(意見) 神主は出てこない。日中戦争後、小石川に忠霊塔を建てて、戦没者を慰霊追悼するための事業をおこなう協会を東京市がつくった。戦後、それが政教分離に反するという問題がおき、その問題の処理の過程で、戦没者だけでなく、戦災死者まで範囲を広げることと、東京都から切り離して、民間の財団法人にすることにして、今の東京都慰霊協会が発足した。そのあとは、戦災死者の遺骨をどこに持っていくかの問題があった。戦災死者の改葬事業が始まるのが 1948 年で 3 年かかって、それも 1950 年に終わっている。

(意見) 神式の問題も深刻な問題であった。戦争中に「英霊公葬運動」があって、加藤隼戦闘隊長とかの英霊の葬儀は仏式でしていることは、けしからんと、右翼の団体が、神式を要求していた。そして、段々神式になった。でも、部隊葬などの末端ではほとんど仏式あった。護国神社も神式と仏式と両方やっていた。神式仏式どちらかは、微妙な問題でずっとある。

(意見) 空襲の慰霊の前に、震災記念日にやっていた慰霊祭がある。それは、戦前には総理大臣が来たりして、一種国家的な儀礼としておこなわれていた。

(意見) 都市の問題として、戦争が終わった後に、負けたとか勝ったとかではなくて人が帰ってくる問題がある。

(報告者) 公式の政策としては人口抑制で、「帰ってくるな」が基本であった。ただ、転入について建前は制限を加えるけれども、なし崩し的に帰って来ている。それが食糧危機を一層加速させることになった。

(意見) 人口抑制は 23 区内だけであって、すぐ形骸化している。

(意見) 疎開しても、戦争が終わったら元の地域に戻って来られる訳ではない。

(質問) 広島で町並み復元運動をやって、一軒一軒思い出して、あの家は何人いたけれども、分かんなくなったとか調べて、それで被害の数を計算した。町並み復元運動はある程度、他の地域でもやっていた記憶があるけれども、東京ではしていないのか。

(報告者) 遺族会が 90 年代以降にある程度やっている。

(質問) それは死んだ人と、疎開に出て、戻って来た人までは置いていないのか。

(報告者) そこまではやっていない。そこに誰がいたかということだけである。

(意見) 自分の土地でも戻ってみたら先に誰かが居たということもよくあった。まして、焼けて借家だと、借家権があるはずだけでも、戻れていない。

東京に戻るとしても、とりあえず、知り合いの所に転がり込むとか、昔の商売の仲間を頼ってとかになる。だから、住んでいた所に生活の基盤を再建できたのは、かなり限定された。

(報告者) 震災の時は、借家人でも戻ってきて建物建てたら、追認されるというのがあったが、戦

災の時はどうか。

（意見）正式に転入しないと、外食券や配給通帳がもらえない。配給制度が機能している間は、それが実質的に働いた 1949 年には、もう食料も出回るから規制が働かなかった。

（意見）主食の配給なくなるのは随分遅い。

（意見）主食以外の他の配給にはむらがある。

（質問）さっき言われた、誰かが勝手に入ってきて、不法占拠したというのは、土地の所有権とかは、書類が全部燃えても、記憶でいけるのか。GHQ が憲法を作って、財界を改革して、農村では農地改革をやった。都会の土地はどうかと改めて思った。今でも、昔に作った道路の計画が頓挫しているものがたくさんあるが、あれは戦後すぐの計画なのか。

（報告者）そういうものもある。

（意見）都市の土地は、財産税を土地で物納して、取られたケースが多い。中世史家の網野善彦の家は白金で白金御殿と呼ばれた洋館だったけれども、ある日、僕が行ったら彼は悲しそうな顔して、「この家は明日、財産税に取られるのだ」と言っていた。彼の家は甲府市の網野財閥だった。

（意見）財産税は高額所得者にはかなりの痛手だった。

（意見）小平市の、僕が住んでいる所は、日通団地といって、日通が宅地にしたところである。日通の前は、泉山三六という、国会で女性に抱きついた議員が持っていた土地だった。彼が大蔵大臣の地位を利用して、財産税で納めた土地を全部自分のものにしたのだと思う。それを日通に高く売った。税金を払えないから、財産税は大金持ちでなくても、都市の居住層には痛かった。

（意見）臣籍降下した皇族も、あれでボロボロになった。

（意見）それは、小田部雄次さんが調べているかも知れない。

（質問）前に、成田龍一さんが借地権のことで言っていたが、関東大震災と比べてどうなのか。

（意見）借地借家人組合ができて闘争したので、借地借家人の権利は保護された。地主を保護するというのはあまりない。

（報告者）逆に、公共用地を占拠するのも、ずっと続く。月島のもともとは市電・都電のものだった土地に不法占拠の住人が長年住んでいて、整理が終わるのが 2000 年代に入ってからで、それで再開発ができた。

（意見）本当に住む所がなかった。僕は学生だったけど、1947 年頃に東京に戻って、住む所がないから自治会の委員をしていますが、研究室に寝ていた。そういうのは文学部だけでもたくさんいた。その時、誰かが板橋かどこかに東京都の、引き揚げ者寮という名前の、誰もいない建物があるというので、占拠した。占拠して、2、3 日で警察に追い払われたけれども、それをきっかけに東京都はそういう建物をつくりだした。

（意見）うちも借地で、3 年後くらいに戻ってきたら違う家が建っていた。それで、まだ子どもだったが、私がよく父に、「あそこはうちだったのだからどいてもらえばいい」と言っていた。そうしたら、父は「だめなんだよ」と言っていた。そこで、大きな動物病院をやっていた方が、気の毒だということで、家の一部を譲ってくれた。そこは、戦後すぐに関根自転車という自転車屋さんになって、そのうち自転車屋さんもどっか追い払われて、今はアサヒセイリンかなにかの大きな工場になった。

その時住んでいた所に、すごく広い土地があって、同じようなトタンでつくられた住宅がたくさんあった。みんな同じような形で、トタンで囲ってあって、本当に粗末な家が何十軒もあった。私が小学校の時に、そこには友達が居たので、よく遊びに行っていた。それはどういう人なのかと

思ったら、青バスっていうバス会社の従業員達のための住宅だった。それも3年位でまた追い払われて。友達もどこかに行ってしまった。そこは今、公園になっている。だからたぶん、公の土地に建てて、追い払われたのだと思う。

（質問）学問として都市計画はいつぐらいからあったのか。例えば、朝鮮に侵略して、それで日本が理想の国をつくるといった時には、都市計画はあったのか。

（意見）朝鮮の場合は、日清戦争の後、日露戦争の前に、ソウルをその頃の韓国政府が、非常に短い時間で全部やる。それで、ホワイトハウスの正面にそっくりの、官邸をつくったりしたが、今でもある。その後は日本の植民地になったので、一番の目抜き通りは、だいたい日本人がつくったものになった。

（報告者）後藤新平は植民地だった台湾で、実践しながら、都市計画の問題意識がそこで作られた。それを日本で東京市長として実践した。

（質問）田園都市はどんなのか。

（意見）それは、五島慶太らが、震災後に郊外に住む人が、増えてくるので、小田急を作ったり、東横線を作ったりして進めたものである。計画的にしたのかどうかは分からないが、震災の復興の一環である。

（意見）震災との比較の方が、イギリスと比較するより面白いと思う。震災後の復興は、途中で大分妥協し挫折し、ほとんど完成しなかった。そのことが、戦災の時、ひどい目にあった1つの理由であると思う。軍人自身が「こんなことではいけない」と、いろいろな所で講演で言っているのに、その対策が取られないままに戦争をしてしまったという感じがする。

杜撰というか、「マッチ箱のような」と盛んに言っているのに、全く対策が取られていない。地下水位が高いから掘れないとっている所がある。でも、東京には横穴式のトンネルを掘れば、避難壕になることが、東京市の調査で分かっているのに、たいしてやっていない。1943年頃になって、やってそれらをつくる許可をしている。結局震災の時に徹底してやらなかったことが、後になって、被害を大きくしている。

さっき指摘された、日本人は「従順な半面で、多数になれば攻撃に加担した」という言い方は適切ではない。イギリスではレンガの建物で爆撃には非常に弱いけれども、焼夷剤については非常に抵抗力が強く、そんなにひどい被害は受けていない。確かにひどい所はひどいけれども、日本ほどではない。日本の場合は、「平地になってしまった」ということが書かれている。完全な焼け野原になった所では、焼けトタン集めて、なんとかそこに住むしかない。その辺の差を無視しているのではないかと思う。

（報告者）震災と戦災という話で、震災の復興をどう評価するかという問題で、思い出した話がある。昭和天皇が「後藤がもっとやってくれていれば、戦災は軽くて済んだはずだ」ということを、戦後の記者会見で言っている。「後藤の計画がちゃんとしていれば」という話が出ている。そこには震災復興の不十分さが、戦災の被害を大きくしたという歴史認識がある。一方で、最近の都市計画史では、先程の荒井さんの話のように、震災復興の方が評価が高く、戦災復興の位置付けが低い。そういう対比がある。

昭和天皇と都市計画というのは気になっている。瀬畑さんに聞いたら、昭和天皇と東京というテーマは、神話化されている部分があって、実態をどう評価するかが難しいということである。でもやらないといけないと思う。

それから、黒田さんが言われた比較論で、国民性の比較はまずいが、焼けトタンを使う話も含め

て、なぜ日本では違法住宅は族生して、なぜイギリスはそうではなかったのか、きちんと比較すれば、いろいろな面白い論点があると思う。

（意見）昭和天皇と東京という話では、震災の後でのちに昭和天皇になる東宮が来たという話を、私はいろんな所に聞いている。戦災の時も空襲の1週間後、3月18日に、深川や神田などを一周した。その時天皇が、周りの人に、「震災の時よりもひどい」と漏らしたと、何かで読んだことがある。しかし、それは死体を片付けた後なので、建物の被害がひどかったということで、実態とは違う。

現在も、その視察の記念碑が深川の富岡八幡宮の境内に建っている。その脇に、それから何年か後に建てた別の碑がある。そこには昭和天皇の御製が彫ってあって、この惨状を見たから、終戦の聖断が下されたと書いてある。日本人国民性の話が出たけども、事実と全く逆で、聖断が下されるまでの3月から8月の間にどんな悲劇があったか、沖縄や中小都市がやられて、それから広島・長崎、満州・シベリアと続いた。民間人の被害の大部分がその数か月間にあった。それを昭和天皇の功績のように記しているが、そういう認識が看過されている。

（質問）碑をつくった主体は誰か。

（意見）木場界隈の有力者と思われる人たちの名前が入っているが、東京都の名前も入っている。

（まとめ・文責石橋星志・山辺昌彦）